

一方、今回取り上げた「483慰少男女」で詠まれているのは、**補説**①で引いた『大鏡』の一文「幼くおはしける男君、女君たち慕ひ泣きておはしければ「小さきはあへなむ」とおほやけもゆるさせたまひしぞかし」のような背景のもとで、太宰の地に引き連れて来た子供たちであった。その道真にとって、いとおしくてならない、また、悲傷の日々の中で大きな支えとなり、慰めでもあったであろう、この子供の中の一人を亡くしたことを詠った詩が、次の④「503秋夜」である。この作品については既に拙稿で論じた。（熊本大学「国語国文学研究」第三十九号五〇頁～五十四頁）

ここでは、原文・訓及び口語訳のみを載せる。

「503 秋夜」

- | | | | |
|---|---------|-----------|---------|
| 1 | 床頭展轉夜深更 | 床頭 | 展転して夜深更 |
| 2 | 背壁微燈夢不成 | 壁に背く微燈 | 夢成らず |
| 3 | 早雁寒蛩聞一種 | 早雁 寒蛩 | 聞くに一種 |
| 4 | 唯無童子讀書聲 | 唯童子の書を読む声 | 無し |

童子小男幼字 近曾夭亡

童子は小男が幼字、近ころ曾て夭亡す

口語訳

- 1 (秋の夜長) 寢床で眠れるまま寝返りをうっているうちに(いつの間にか)夜明けを迎えてしまった。